

幼児の集団食事場面に関する研究の動向

伊藤 優

(2013年10月3日受理)

A Review of Researches at Meal Scene in Preschool

Yu Ito

Abstract: This paper aims to gain perspective about the preschool meal scene by reviewing various research. Specifically, we get an overview of the preceding studies discussing teacher involvement with children by verbal and behavioral communication at meal scene in preschool. Then, we arrange the teacher involvement with children at the meal scene in preschool in preceding studies. As it turned out, Three points are gained as a subject. First, we need take account of the characteristic of a meal scene. And we need regard the teacher at a meal scene not only as an informer but also as a eater. Moreover, we need consider involvement of the teacher and children after also including the belief over a teacher's own meal.

Key words: meal scene, preschool, involvement

キーワード：食事場面、保育施設、かかわり

1. はじめに

平成17年に食育基本法が公布されて以降、「食育」の重要性について、多くの指摘がなされている。それとともに、栄養教諭導入や法改正など教育現場の中に「食育」を導入する動きがみられる。「食育」のとらえ方は諸説あるが、食育基本法では、「生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきもの」と位置付けられている。「食育」を担う者によって目的や方法が異なるものの、教育現場においてこれまで「食育」に関する様々な取り組みが行われている。

特に、幼児期は生涯に渡って行う食事に関する知識や技能の基礎を培う重要な時期である。たとえば、酒井・足立(2002)は、満3歳までに食事前後のあいさつができるようになることを明らかにしており、阿部(2009)は、3歳ごろから箸を用いて食べることが可能となることを報告している。また、子どもは3歳になるころまでにはおしゃべりをしながら食べるという

文化的・社会的な食事に参加できるようになる(外山, 2008a) ことから、幼児期はコミュニケーションを取りながら食事することができる最初の段階であるといえる。このように、3歳頃までには大人と同じように一人で食べることができるようになる一方で、他人と一緒に食べる際のマナーやルールなども身につける時期であるといえる。加えて、食事場面において、幼児期は乳児期と比べて言葉を用いたかかわりが増えるとともに、一対一のかかわりに留まらない集団でのかかわりが生じる時期と考えられる。

これまでの幼児期の食育に関する先行研究を概観すると、栄養に関してどのように教えればよいのか検討した研究(木林・上野・鏡森, 2000; 岡崎・高橋・奥, 1999)や、特定の子どもの行動に焦点をあてた研究(山内・小出・山本・大羽, 2010; 高橋, 2005)が多い。しかし、先述したように、幼児期は他児や保育者と一緒にかかわりながら集団で食べることができるようになる最初の時期であり、このようなかかわりが子ども

に与える影響は大きいと考えられる。特に、保育施設は多くの子どもたちと保育者が一緒に食事を行う場である。

このような保育施設の集団食事場面におけるかかわりの必要性については、様々な指針やガイドラインで指摘されている。たとえば、平成20年に改訂された幼稚園教育要領では、第二章「ねらい及び内容」の健康の領域において、「先生や友達と食べることを楽しむ」という記載が新たに付け加えられている。また、同じく平成20年に改定された保育所保育指針では、第5章「健康及び安全」において、「食育の推進」の項目が新たに加わった。その中では、「子どもが生活と遊びの中で、意欲を持って食にかかわる体験を積み重ね、食べることを楽しみ、食事を楽しみ合う子どもに成長していくことを期待するものであること」と記載されている。つまり、他児や保育者とのかかわりの中で、食事を楽しみ合う子どもへの成長の期待が述べられているといえる。このように、平成20年に改定された幼稚園教育要領及び保育所保育指針のどちらにおいても、実際に食べる行為を伴う食事場面の重要性やそこでの他児や保育者とのかかわりの大切さについて触れられている。

さらに、集団食事場面におけるかかわりの重要性について述べているのは要領だけではない。平成24年に厚生労働省から出された「保育所における食事の提供ガイドライン」では、「食を通じたコミュニケーションは、食の楽しさを実感させ、心の豊かさをもたらすことにもつながる」ことを記載している。また、平成16年に公布された「楽しく食べる子どもに～保育所における食育に関する指針～」では、友達と一緒に食べたり、保育士と一緒に食べたりといった「人とのかかわり」を保育所で提供することの重要性を指摘している。これらのガイドラインや指針は、集団食事場면을単なる食物摂取の場としてのみで捉えておらず、子ども同士、または子どもと大人のかかわりの場としても捉え、重要視しているといえる。以上のことから、要領や指針、ガイドラインでは集団で食べることの重要性が示されているといえる。

しかし、子どもたちのかかわりの場として、食事場面の先行研究を概観した富岡（2010）は、幼児期の子どもと保育者のかかわりの様相を検討した研究や複数の子どもと保育者が集団で一緒に食べる食事場面についての文献の少なさを指摘している。このことから、これまでの幼児期の食育を扱った先行研究では、集団食事場面におけるかかわりの視点が欠けていたといえるだろう。一方で、集団食事場面における子ども同士または保育者と子どもがかかわり合いながら食べる効

果を明らかにした研究も散見される。たとえば、Patel, & Schlundt（2001）は、他者の存在は食物摂取を劇的に増加させることを報告しており、Lumeng, & Hillman（2007）は、人数の多いグループで食べた方が子どもの食事が量が増加することを示している。また、Salvy, Vartanian, Coelho, Jarrin, & Pliner（2008）は、一緒に食べる人が親しい人の時、子どもたちの食事が量が増加することを明らかにしている。さらに、子どもたちは他児や保育者をモデルとして食事が量が増加することも報告されている（Hendy, & Raudenbush, 2000）。これらの研究結果は、他児や保育者と集団で食べることが子どもの食量の増加に大きな影響を与えることを示しているといえる。

以上のように、要領やガイドラインなどにおいて、集団食事場面におけるかかわりの重要性が指摘されているとともに、集団食事場面におけるかかわりの効果も明らかにされている。このことから、幼児期の食育を考える上で、集団食事場面におけるかかわりについて検討することが必要であるといえる。

そこで、本論文では、保育施設の集団食事場面における子ども同士、または保育者と子どものかかわりに関する先行研究を概観することで、幼児期の食育を捉え直す視点を得ることを目的とする。具体的には、集団食事場面での保育者や子どもの言葉や行動を介したかかわりについて検討した先行研究を概観する。そして、集団食事場面における子ども同士や子どもと保育者とのかかわりが先行研究でどのように捉えられているのかを整理する。さらに、それらの先行研究の課題と展望を検討し、今後の集団食事場面における研究の可能性を探る。

なお、本研究の中でいう「かかわり」は、保育者や子どもの言葉や行動を用いた相互交渉とする。そのため、本論で用いる「やりとり」や「働きかけ」はすべて「かかわり」に含められるものとする。また、本研究でいう「集団食事場面」とは、複数の子どもと保育者がともに食事をしている場面とし、その際は1対1のかかわりも含むこととする。

2. 集団食事場面における子ども同士のかかわり

集団食事場面における子ども同士のかかわりについての先行研究の動向としては、(a) 子ども同士のかかわりのきっかけ作りに関して検討した研究、(b) 集団食事場面における子どもの行動変容を検討した研究に分けられる。以下はその分類に基づいて検討していく。

(1) 先行研究における集団食事場面における子ども同士のかかわり

(a) 子ども同士のかかわりのきっかけ作りに関して検討した研究

保育施設の食事場面において、子どもたちは同じ、もしくは類似の食べ物や食具を用いて食べている。このことから、食事場面は集団でのかかわりが発生しやすい場であるといえる。このように、食事場面が集団でのかかわりの場となりやすいことから、子どもが他児とかかわるきっかけをどのように作っているのかを検討した研究が散見される。

たとえば、外山（1998）は2歳児と4歳児クラスの子ども達の食事場面での席決め行動に着目し、そのやりとりを分析した。その結果、2歳児は隣り合わせの席を好んで座っていることを明らかにしている。2歳児は、4歳児と異なり身体接触をきっかけとしたやりとりと食卓上の物事をきっかけとしたやりとりが多く、このようなやりとりは隣り合わせの席に座る子ども間において多く認められた（外山, 1998）。そのため、2歳児は隣り合わせの席に座るとその友達との間でやりとりを生じさせやすいことを経験上知った上で、すでに座っている友達の隣の席に座っている可能性があることを外山（1998, 2008b）は指摘している。この研究から、子ども自身が食事場면을食物摂取の場だけでなく、コミュニケーションの場としてもとらえているといえるだろう。

また、外山（2000）は4～5歳児の食事場面において発生する「○○あるひと、てーあげて」という発問と「はい」という応答からなるルーティンについて検討した。その結果、子どもたちはルーティンをやりとりが続くための道具として用いていることを明らかにしている。加えて、柴坂・倉持（2009）は、「～の人」ルーティン形成過程が、幼稚園において大人が維持している定型化した質問—応答様式を子どもが発見し、その発見を仲間活動として共有し、仲間文化の中に取り込んでいく過程であることを明らかにしている。これらの結果から、子どもはルーティンを用いることによって、集団に参入しようとしていることがわかる。

以上の先行研究は、食事前の座る席の工夫や食事開始時のルーティンの活用など、子どもたちがどのように他児とかかわるきっかけを作っているのか示している。このようなかかわりのきっかけ作りに関しては、他の活動場面でもみることができる。しかし、先行研究において、食事場面は子どもたちが集まって一定時間落ち着いて座ることや空間配置から、会話や言葉遊び、遊ぶ約束など様々な仲間活動が起こりやすい場面であるとみられている（柴坂・倉持, 2009）。こ

のような食事場面の特性を踏まえた上で、これらの研究では食事場면을観察の場として、席決めやルーティンなど子どもが他児とかかわるきっかけ作りに関して検討しているといえる。

(b) 集団食事場面における子どもの行動変容を検討した研究

食事場面において、子どもはただ食べるだけでなく、楽しく食べるため会話をしたり、箸を使ったりなど様々な行動をとっている。集団食事場面における子ども同士のかかわりの研究をみると、このような子どもの行動の変容を検討した研究もみられる。

まず、食事場面における言葉を用いたかかわりが、子ども間でどのように変容したのかを検討した研究がみられる。たとえば、対話が起きやすい遊びと食事場面で観察を行った淀川（2009）は、言葉を用いた三者間対話の成立要因を検討しており、淀川（2010）は食事場面での対話における二層構造に着目し、保育集団での対話の発達的变化を明らかにしている。また、淀川（2011）は、「確認し合う事例」について、宛先・話題・話題への評価に着目し食事場면을観察対象として分析を行っている。さらに、淀川（2013）は、どのような発話で応答を引き出しあい、対話しているかという発話の応答性に注目することで、食事場面で、様々な物事や自分の経験等についてどのように伝え合っているか、その特徴がどのように変化するかを明らかにしている。加えて、富岡（2011）は幼稚園での食事場面における3歳児、4歳児、5歳児の会話の発達を検討した。その結果、食事場面における発話数、会話の継続に年齢による偏りがあることや、3歳児ではその場にあるモノを話題に会話をすることが、他の年齢の子どもより多いことなどを明らかにしている。

以上の淀川（2009；2010；2011；2013）や富岡（2011）の研究は、集団で食べる際の会話の多さに注目し、そこで用いられる子どもたちの言葉の変容について明示化している。このような子どもの言葉の変容に加えて、周りの子どもたちとのかかわりによる食べ物の摂取行動の変容について検討した研究もみられる。

子どもの食事量の増減について子どものかかわりを検討した研究として Birch（1980）や HENDY（2002）の研究がみられる。Birch（1980）は特定の野菜を好まない子どもがその野菜を好む3、4名と一緒に食事をする、やがてその子どもはその野菜を好んで食べるようになったことを明らかにしている。また、周りの子どもとかかわる中で子どもが食べ物の食事量を変化させるのか男女差も含めて調査した HENDY（2002）は、女兒の方が男児よりも食べ物の受け入れに関して

周りの幼児に左右されることを明らかにしている。これらの結果は、好きではなかった野菜でも、周りの友達が生かす様子を見ることで食べられるようになることを示唆している。つまり、集団の中で食べることで子ども同士がかかわり合い、他児をモデルとすることで、食べ物の受け入れを促進することにつながったといえるだろう。

これらの先行研究は食事中の子どもたちの言葉の使い方や食べ物の摂食行動が他児とのかかわりの中で変容することを示している。食事場面は子ども同士の比較的安定した近接性が確保されており（富岡，2010）、子ども同士のかかわりが発生・発展・維持されやすい場面であるといえる。そのため、子どもの言葉の使い方の変容や他児をモデリングすることによる食べ物の摂食行動の変容といった食事中の子どもたちの行動の変容が観察しやすかったと推察される。

(2) 集団食事場面における子ども同士のかかわりに関する研究のまとめ

以上の先行研究から、保育施設の集団食事場面が、子ども同士のかかわりのきっかけ作りや、食事場面における子どもの行動の変容を観察しやすい場であることが示された。保育施設の食事場面は時間的・空間的な制約が強く、何人かの友達と比較的近い距離で、ある程度の時間額を見合わせるができる場であるといえる。また、介在する資源は食材や食具など食事にかかわるものであり、全員が同じ物もしくは類似の物を共有しているためイメージが持ちやすく、集団でのかかわりが生じやすい場ともとらえられている。このような食事場面の特性が、多くの先行研究で食事場面が観察の場として選ばれている要因ではないかと推察される。

3. 集団食事場面における保育者と子どものかかわり

集団食事場面における保育者の存在やかかわりは子どもに大きな影響を与えるといわれている。保育施設における印象的な食に関する思い出を質問紙調査により検討した上羽・古郡（2007）は、保育施設の食事場面において、食べるのが遅かったことを食事場面での嫌な記憶として記述している学生について指摘するとともに、保育者の気遣いをうれしかった思い出として記憶している学生の記述も示している。保育施設の食事場面を楽しかった思い出として記憶している者が多い（古郡・上羽・高橋，2008）一方で、食事は食べ物の嗜好や食べる際のスピードなど個人的な要因を伴っているため、集団で食べる際には他児と比較されやす

く、それが子どもにとっては苦痛となることもある。そのような食事場面において、保育者の存在やかかわりが子どもにとって、安心感をもたらすこともある。

このように、子どもに大きな影響を与える集団食事場面における保育者と子どものかかわりについて検討した先行研究の動向としては、(a) 保育者の子どもへの働きかけについて検討した研究と (b) 集団食事場面における保育者と子どものかかわりの特質について検討した研究に大別することができる。以下はその分類に基づいて検討していく。

(1) 先行研究における集団食事場面における保育者と子どものかかわり

(a) 保育者の子どもへの働きかけについて検討した研究

保育施設の食事場面において、保育者は子どもたちの好き勝手に食べさせるのではなく、マナーやルールを教えたり、好き嫌いをなく食べさせようと働きかけることが多くみられる。このような教示者・指導者として、保育者が子どもにどのように働きかけているのかを検討した研究としては以下のものがみられる。

保育者の発話分析を行った中澤・鍛冶・石井(1995)は、保育者の発話と子どもの年齢、観察時期などとの関係性から検討を行った。その結果、保育施設で食事が始まる5月くらいでは、観察対象となった3歳児・4歳児クラスどちらの保育者ともに、食べることの促しや食事ルールやスクリプトの確立のための声かけを中心に働きかけていることを明らかにしている。また、年長児クラスの保育者の発話分析をおこなった今村（2008）は、保育者の食事場面における発話の中で最も多いのが、摂食促し発話であり、次いで、日常会話発話、マナー指導発話であると示している。これらの研究結果から、時期によって異なるものの、実際の食事場面において保育者は食べさせることや、マナーやルールを教えることが多いといえる。

加えて、Wardle, Cooke, Gibon, Sapochnic, Sheiham, & Lawson (2003) は、2～6歳の子どもたちに大人が様々な介入を行った後、以前嫌いだった野菜が好きになるかを調査した。すると、大人が栄養の情報を与えるだけでは飛躍的に食事を上げることはできず、野菜の好みを増加させるには何度も提示することが有効であることを報告している。また、Addressi, Galloway, Visalberghi, & Birch (2005) は、保育者が同じものを食べている時の方が、ただ保育者がいるだけでもしくは子どもと違うものを食べている時よりよく食べることを明らかにしている。さらに、Wardle, Herrera, Cooke, & Gibson (2003) は、保育者の介入

によって、子どもは食べたことのない野菜をどのくらい受け入れるのか実験を行った。その結果、保育者が介入したときのほうが介入しないときより消費量・好みともに増加したことを報告している。この他にも、Galloway, Fiorito, Francis, & Birch (2006) は、保育者のプレッシャーを与えることが子どもの食べ物の食事量の促進に効果がなく、逆にプレッシャーをかけた食べ物にはネガティブな反応を示したことを報告しており、Horne, Tapper, Lowe, Hardman, Jackson, & Woolner (2004) は、果物や野菜を食べて強くなるヒーロービデオを見せるなどの架空のヒーローを使った介入が子どもの果物や野菜の食事量の増加に効果的だったことを明らかにしている。これらの先行研究から、保育者の働きかけ方によって子どもの食事量や嗜好が変化するといえる。

食事場面は時間的・空間的に枠づけられていることに加え、生理的欲求を伴う行為でもあるため、食べたとしても食べられないことも多く、保育者と子どもの欲求が対立しやすい。さらに、食事は社会・文化的側面を強く有しているため、集団で食べる際のマナーやルールなどを保育者が子どもに教える場ともなりうる。このような食事場面の特性から、先行研究においても保育者から子どもへの一方向的な働きかけを検討するものが散見される。以上のことから、食事場面において、保育者は食事を促したり、マナーを教えたり、コミュニケーションの機会を作ったりする教示者・指導者の側面が強いと言え、先行研究でもこのような観点から検討されているといえる。

(b) 集団食事場面における保育者と子どものかかわり の特質について検討した研究

保育施設の食事場面において、先述したように、保育者は教示者・指導者としての側面を強く有しており、研究が盛んに検討されている。一方で、保育者を教示者・指導者としてだけでなく、食事の主体者としても捉えようとしている研究も行われている。

たとえば、保育施設の食事場面において保育者が意識的に行おうとしている働きかけと、実際の働きかけ双方を検討し、保育施設の食事場面における保育者の働きかけの特質を明らかにした伊藤 (2013) は、保育者が食事場面で意識的に行おうと考え、働きかけても、実際の食事場面においては理想通りにはいかない状況を見出した。その要因として、保育者は集団食事場面において子ども個人の身体的・生理的嗜好に反する働きかけを行い、子どもに心理的負担を与えてしまう危険を内在することを明らかにしている。また、保育者が集団食事場面において働きかける際、子どもが「食

べる」と「楽しむ」、そして「学ぶ」と必ずしも両立しない複数の行為を同時並行的にできるよう配慮しないといけない難しさを含んでいることも食事場面での保育者の働きかけの難しさの要因として示している。保育者は一緒に食事をしている主体者としての側面も活用し、工夫しながら働きかけているものの、先述した要因によって、保育者は働きかける際に難しさを感じてしまっているのではないかと推察される。

加えて、金澤 (1993; 1994) は、保育施設の食事場面において、子ども個人に好きな時間に自由に食事することを許可するという実験的な保育実践を報告した。金澤 (1993) は、保育者自身は個々の子どもに食事の時間やスタイルを選ばせているつもりでも、無意識のうちに子どもの食事の時間やスタイルを方向づけてしまっていることを指摘している。また、金澤 (1994) は遊び場面など他の場面と比較して、食事場面においてははまだに保育者に主導権が握られていることを指摘している。この金澤の一連の実践 (1993; 1994) において、子どもは自身の意志や思いで食事時間や食事内容を決めている。そのため、保育者はできる限り子どもに「食べよう」などとは言わず、教示者・指導者の側面を出さないように子どもにかかわっている。一方で、保育者は「一緒に食べようよ」と子どもに言いたいという抑えがたい衝動が生じ、実践をする上で保育者の中で悩みや葛藤が伴ったことを報告している (金澤, 1993)。この研究から、食事場面において保育者が教示者・指導者としての側面を抑えがたい実状がみてとれる。

以上の先行研究では、食事場面の特性が他の場面と異なる保育者と子どもとのかかわりや、それに伴う困難さを生じさせていることを示している。これらの結果を明らかにする際、伊藤 (2013) や金澤 (1993; 1994) は保育者を教示者・指導者としてだけでなく、食事の主体者としても捉えようとしている。さらに、これらの研究では、日常的な食事場面や実験的な保育実践での食事場面において、実際の保育者と子どものかかわりやその時の保育者の意図や心情も分析対象としている。一方で、これらの先行研究では、食事時間内の保育者と子どものかかわりに関する保育者の意図や心情の分析に終止しており、保育者の食事に対する考えは分析の対象外として扱われている。

(2) 集団食事場面における保育者と子どものかかわり に関する研究のまとめ

以上から、集団食事場面における保育者と子どものかかわりを扱った研究の多くは保育者の子どもへの一方向的な働きかけを検討したものであることが示され

た。その要因として、食事が社会・文化的な行為であることに加え、時間や空間などの制限や集団で食べる際のマナーやルールなどが存在するため教えることが多いと考えられる（伊藤，2013）。また、食事場面は他の場面と比較して、食べるという行為が内容的に枠づけられているため、保育者は子どもの自由な行動を許すわけにはいかず、自ずと保育者と子どもの間での衝突が多くなるといえる（金澤，1993；1994）。さらに、集団で食べる際は他児への影響等も考慮しなくてはならず、保育者と子どもが1対1で食べる時と比べ、より指導的になってしまうことも考えられる（中澤・鍛治・石井，1995他）。このような要因が教示者・指導者としての保育者の働きかけの研究の多さにつながっているのではないかと推察される。

加えて、これらの先行研究では集団食事場面における保育者と子どものかかわりの実状及びその時の保育者の意図や心情を分析対象としており、保育者の食事に対する考えは分析対象とはされていないことが示された。

4. 集団食事場面に関する研究の課題と展望

本論文では、保育施設の集団食事場面に関する先行研究を子ども同士のかかわりと子どもと保育者とのかわりに大別し、それぞれの研究の動向を検討した。その結果、先行研究から3つの課題が浮かび上がった。

第一に、食事場面の特性を考慮することが課題としてあげられる。保育施設の食事場面は、子どもと保育者が時間的・空間的に枠づけられた中で食事を行っているため、集団でのかかわりを発生・維持・促進しやすい側面を有していることが示された。また、食事場面において、子どもや保育者は一緒に食べているグループを超えて、集団でのかかわりを生じやすいといえる。食事場面でのこのような特性によって、先行研究では子ども同士のかかわりのきっかけ作りや、子どもの行動変容を見る観察の場の一つとして捉えられていることが示された。しかし、食事場面は生理的欲求を伴う場面であるとともに、文化・社会的な側面を強く有している場面でもあるため、他の活動場面での子どもと保育者のかかわりと異なるのではないかと考えられる。今後は、食事場面で観察を行う意味づけを積極的に行っていくことが、あまりにも日常的な行為であるからこそ、日常生活になじみすぎ、今まで研究対象にすらならなかった食事場面に新たな視座をもたらすものとなるだろう。

第二に、集団食事場面における保育者を教示者・指導者ではなく、食事の主体者として捉えていくことが

課題としてあげられる。食事場面での保育者と子どものかかわりについて検討した先行研究の多くは、保育者の働きかけに焦点を当て、「教える」、「供給する」という一方向的な観点から検討を行っている。特に、近年保育施設の食事場面は、「食育」の広まりとともに教育的意味合いが強くなっており、保育者と子どもを「教える」－「教わる」関係や「供給者」－「受容者」関係で捉える研究が多い。

保育施設の食事場面では、多くの場合、保育者と子どもと一緒に食事を行う。つまり、食事場面は保育者と子どもと一緒に食べ物を食べ、共にマナーやルールを守り、双方がコミュニケーションを取れる場である。保育者はマナーなどを「教える」存在や、食事を「供給する」存在に留まらない、子どもとともに食事をする食事の主体者の側面も持っている。しかし、保育者と子どものかかわりを扱った先行研究では、保育者を教示者・指導者の視点のみで捉えており、保育者を子どもと同じく共食する存在として捉えていない。食事場面は、保育者と子どもが同じ行為を同じように行うことのできる数少ない場面であり、食事の主体者である保育者は同じ食事の主体者である子どもと、食材の性質やルールやマナーを共有する。そのため、保育者と子どもが同じ空間・時間の中で、同じように食事をすることで、お互いが影響し合いながら食事場面を構築しているのではないかと考えられる。

このような保育施設の食事場面は集団で食べることが基本であり、教育的な場という意味を超えて、保育者が子どもに与える影響は大きい。そこで、今後は共に食事の主体者である保育者と子どもが保育施設の食事場面においてどのようにかかわりながら食べているのかを明らかにすることを通して、保育施設で保育者と子どもと一緒に食べる意味や保育者の役割を見出す必要があるだろう。これらを明らかにすることで、教育的な場に留まらない、集団食事場面の新たな側面を示すことができるのではないかと考えられる。

第三に、保育者自身の食事に対する考えも含めた上で、保育者と子どものかかわりを検討していくことがあげられる。保育施設の集団食事場面のかかわりを扱った先行研究の分析対象が、実際の保育者と子どものかかわりやその時の意図や心情に終止していることが示された。食事は生涯に渡る行為であるため、個々の保育者によって食事に対する考えは異なると推察される。そして、個々の保育者が有している食事に対する考えの違いが保育者と子どものかかわりにも影響を与えようと考えられる。そのため、今後はその場の保育者と子どものかかわりに留まらない、保育者自身の食事に対する考えを長期的な観察やインタビューにより

明示化していく中で、保育者と子どものかかわりを検討していく必要があるだろう。

大人が子どもと一緒に食べることの重要性は多くの先行研究で言及されている(室田, 2009a; 2009b)。一方で、食育の取り組みが保育施設に期待されている中、そのような指摘が、保育施設においては、保育者と子どもと一緒に食事をする中で子どもに指導しなくてはならないというプレッシャーとして保育者を苦しめる場合も想定される。そのため、今後の研究では、実際に保育者と子どもと一緒に食べている場面を詳細に検討することによって、一面的な食育の必要性や保育者と子どもが食事を共にすることの重要性だけでなく、多面的な観点から、その意義を見出していく必要があるだろう。

【引用文献】

- 阿部芳子 (2009) 子どもの箸使いと食行動. 相模女子大学紀要, B, 自然系, 73, 11-21.
- Addessi, E., Galloway, A. T., Visalberghi, E. & Birch, L. L. (2005). Specific social influences on the acceptance of novel foods in 2-5-year-old children. *Appetite*, 45, 264-271.
- Birch, L. L. (1980). Effects of Peer Models' Choices and Eating Behaviors on Preschoolers' Food Preferences. *Child Development*, 51, 489-496.
- 古郡曜子・上羽緑・高橋真枝 (2008) 学生の幼児期における「食育」の思い出調査. 北海道文教大学研究紀要, 32, 73-81.
- Galloway, A. T., Fiorito, L. M., Francis, L. A. & Birch, L. L. (2006). "Finish your soup": Counterproductive effects of pressuring children to eat on intake and effect. *Appetite*, 46, 318-323.
- Hendy, H. M. & Raudenbush, B. (2000). Effectiveness of teacher modeling to encourage food acceptance in preschool children. *Appetite*, 34, 61-76.
- Hendy, H. M. (2002). Effectiveness of trained peer models to encourage food acceptance in preschool children. *Appetite*, 39, 217-225.
- Horne, P. J., Tapper, K., Lowe, C. F., Hardman, C. A., Jackson, M. C. & Woolner, J. (2004). Increasing children's fruit and vegetable consumption: a peer modelling and rewards-based intervention. *European Journal of Clinical Nutrition*, 58, 1649-1660.
- 今村光章 (2008) 給食時における幼稚園教諭の発話分析 - 幼児期における「依存型」の食育の枠組みの解明を目指して -. 岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究, 10, 125-134.
- 伊藤優 (2013) 保育所の給食場面における保育士の働きかけの特質. 保育学研究, 51(2), 印刷中.
- 金澤妙子 (1993) 食事の取り組みに見る子どもの主体性. 金城学院大学論集 人間科学編, 18, 73-122.
- 金澤妙子 (1994) 食事の取り組みが子どもと保育者の関わりにとって持つ意味. 金城学院大学論集 人間科学編, 19, 25-62.
- 木林悦子・上野恭裕・鏡森定信 (2000) 集団保育施設(幼稚園・保育所)における食育・栄養教育についての調査研究. 栄養学雑誌, 58(1), 29-36.
- 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針. フレーベル館.
- Lumeng, J. C. & Hillman, K. H. (2007). Eating in larger groups increases food consumption. *Archives of Disease in Childhood*, 92, 384-387.
- 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領解説. フレーベル館.
- 室田洋子 (2009a) 食卓から見える子どもの心・家族の姿. 芽生え社
- 室田洋子 (2009b) 「食育の力」で子どもが変わった! - いっしょに食べて心を育てる - カンゼン.
- 中澤潤・銀治礼子・石井恭子 (1995) 幼稚園教師の食事場面における援助の分析 - 子どもの発達と教師の保育観 -. 保育学研究, 33(1), 59-67.
- 岡崎光子・高橋久美子・奥恒行 (1999) 幼児における咀嚼訓練を伴った栄養教育の評価 - 咀嚼能力向上及び教育内容の定着度から -. 栄養学雑誌, 57(5), 271-281.
- Patel, K. A. & Schlundt, D. G. (2001). Impact of moods and social context on eating behavior. *Appetite*, 36, 111-118.
- 酒井治子・足立己幸 (2002) 幼児の箸を使って食べる行動の発達の变化パターンと構造. 小児保健研究, 61(2), 297-307.
- Salvy, S. J., Vartanian, L. R., Coelho, J. S., Jarrin D. & Pliner, P. P. (2008). The role of familiarity on modeling of eating and food consumption in children. *Appetite*, 50, 514-518.
- 柴坂寿子・倉持清美 (2009) 幼稚園クラス集団におけるお弁当時間の共有ルーティン-仲間分化の形成と変化-. 質的心理学研究, 8, 96-116.
- 高橋美保 (2005) 笑いにみる子どもにとっての「楽しい食事」. 白鷗大学論集, 1(1), 61-74.
- 富岡麻由子 (2010) 子どもの食事場面に関する研究レビュー - かかわりの場としての機能に着目して -.

- 有明教育芸術短期大学紀要. 1. 45-55.
- 富岡麻由子 (2011) 幼稚園の食事場面における幼児の会話の発達. 有明教育芸術短期大学紀要. 2. 65-72.
- 外山紀子 (1998) 保育園の食事場面における幼児の席取り行動: ヨコに座ると何かいいことあるの?. 発達心理学研究. 9 (3). 209-220.
- 外山紀子 (2000) 幼稚園の食事場面における子どもたちのやりとり - 社会的意味の検討 -. 教育心理学研究. 48(2). 192-202.
- 外山紀子 (2008a) 食事場面における1~3歳児と母親の相互交渉 - 文化的な活動としての食事の成立 -. 発達心理学研究. 19(3). 232-242.
- 外山紀子 (2008b) 発達としての共食 - 社会的な食のはじまり -. 新曜社.
- 上羽緑・古郡曜子 (2007) 本学学生の幼稚園・保育所における食の思い出調査. 北海道文教大学研究紀要. 31. 85-92.
- Wardle, J., Cooke, L. J., Gibson, E. L., Sapochnik, M., Sheiham, A. & Lawson, M. (2003). Increasing children's acceptance of vegetables; a randomized trial of parent-led exposure. *Appetite*, 40, 155-162.
- Wardle, J., Herrera, M. L., Cooke, L. & Gibson, E. L. (2003). Modifying children's food preferences: the effects of exposure and reward on acceptance of an unfamiliar vegetable. *European Journal of Clinical Nutrition*, 57, 341-348.
- 山内知子・小出あつみ・山本淳子・大羽和子 (2010) 食育の観点からみた箸の持ち方と食事マナー. 日本調理科学会誌. 43(4). 260-264.
- 淀川裕美 (2009) 2-3歳児における言葉を用いた三者間対話の成立要因の検討 - 第三者の発話と被参加者の応答に着目して -. 乳幼児教育学研究. 18. 63-74.
- 淀川裕美 (2010) 2-3歳児における保育集団での対話の発達的变化 - 「フォーマット」の二層構造と模倣/非模倣の変化に着目して -. 乳幼児教育学研究. 19. 95-107.
- 淀川裕美 (2011) 2-3歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化 - 確認し合う事例における宛先・話題・話題への評価に着目して -. 保育学研究. 49(2). 177-188.
- 淀川裕美 (2013) 2-3歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化 - 伝え合う事例における応答性・話題の展開に着目して -. 保育学研究. 51(1). 36-49.

(指導教員: 七木田 敦)